

## 「東京の地形を読み解く①」

6年生の「土地のつくり(地層)」の学習が始まりました。この単元は、自分たちが住む「土地」の成り立ちを実感し、地層は横(同じ時代)と縦(深さ・ちがう時代)という、二つの広がりを持っていることに気付かせることが、一番の狙いです。化石や火山・地震についても扱います。学習を組み立てる上で一番大切なことは、地層そのものを見せることなのでしょう。しかし、それは容易なことではありません。

鎌倉のように、地層の露頭(地層の断面が直接見えている場所)が豊富にある土地では、実際に見て、触って、地層というものの実体を感じることができます。しかし、都市部では露頭そのものがなく、直接観察することは難しいです。本校のある文京区も例外ではなく、はっきりと層序(地層の重なり)が見える場所は、なかなか見つかりません。地層の露頭が観察できる可能性がある場所は、土地にはっきりした高低差がある場所です。最近の地震によってできた、新鮮な断層が理想ですが、それは望外です。海辺なら海食崖(かいしょくがい)、川の上流部なら川辺の崖があれば、地層の断面が見えます。房総半島では、工事用の砂を採取する現場で、豊富に露頭が見られます。もう一つは、台地と台地の境目、または、台地と低地の境目にある崖です。

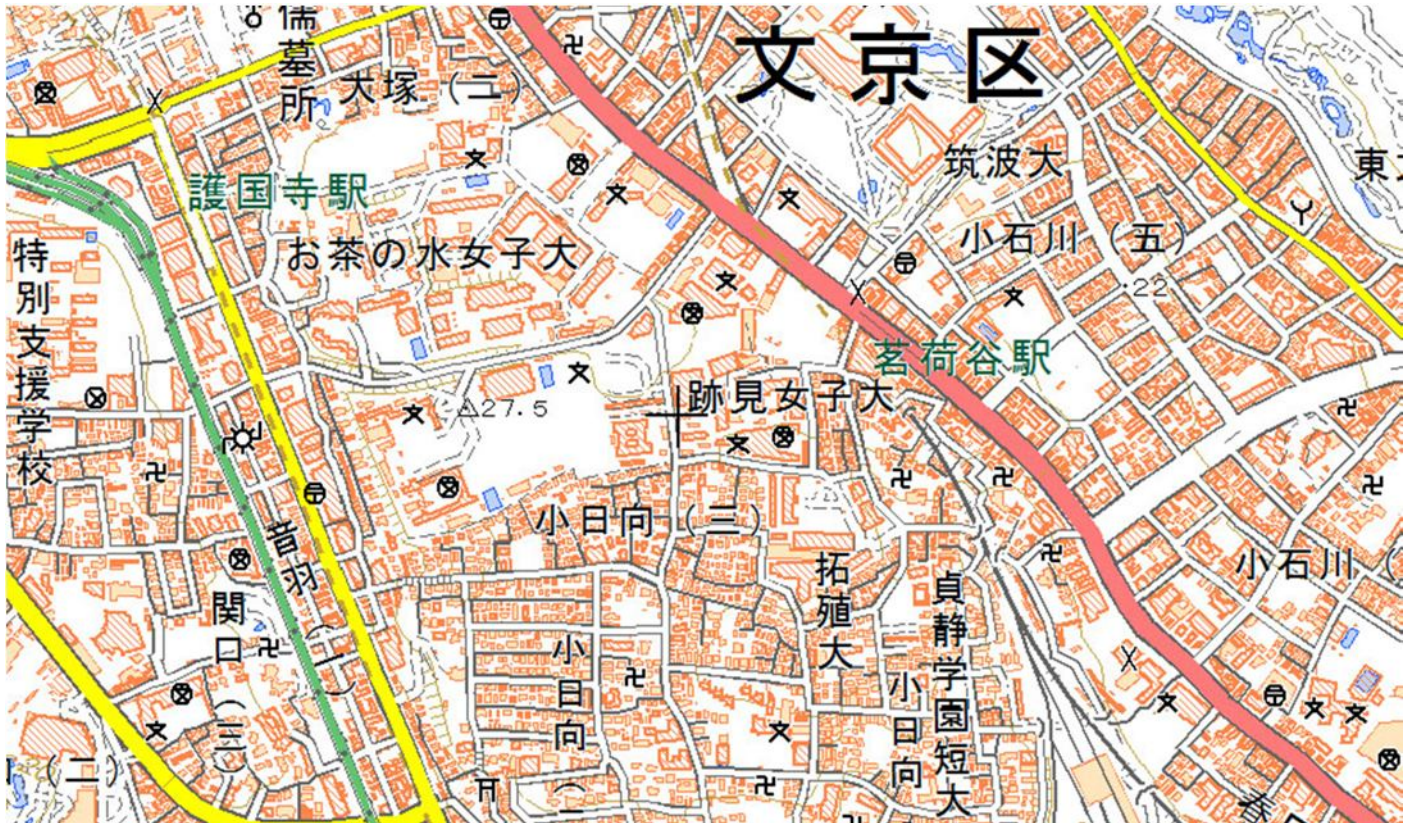


「東京都(島しょを除く)の地形分類図」 作図; C. Tanaka 2014. 10

東京都の市部の大半、区部の西半分は武蔵野台地上に位置しているとわかります。東京都は海拔0m以下の低地から、2000m以上の山岳部までを有する、多様な地形を持っているとわかります。

東京の地形を大雑把に分類すると、西側から「山地」「丘陵」「台地」「低地」の4種類になります。東京の都心部は、武蔵野台地と東京低地の境目に位置しています。台地と低地の境目には、はっきりとわかる高低差があります。文京区、台東区、港区、千代田区、世田谷区南部、大田区など

に顕著で、高低差（比高）は大きいところでは15メートル以上にも及びます。これらの区に坂道が多いのは、武蔵野台地の東の縁に位置しているからです。こうした台地と低地の境目には、地層が見られる露頭が存在する可能性が高いわけです。こうした台地と低地の境目にある崖を発見するには、当然地形図が役立つわけですが、現在の東京は建物や道が多すぎて、地形図にほとんど等高線の表記がありません。



### 「文京区茗荷谷駅周辺の地形図」

このあたりは台地と低地がせめぎ合い、坂も多く、非常に複雑な地形です。しかし残念ながら、地形図にはほとんど等高線がなく、その地形を読み解くことは不可能です。

これを解決する方法を研究しました。なかなかいい方法を見つけました。次回からその方法と、授業でも活用を紹介したいと思います。

(お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋)